

直言

自院の特性を生かして日常診療を大切に 人生の始めから終末まで地域と共に歩む

あらためて高い倫理性と経営堅持の重要性痛感

阪南中央病院(大阪府) 院長

やまます せい いち
山根 誠一



1973(昭和48)年、同和対策事業特別措置法に基づき阪南中央病院が設立されました。奇しくも同時期、この地域に徳洲会創設者の徳田虎雄先生が、最初の病院である徳田病院(現・松原徳洲会病院)を開設されています。当時、この地域は大阪の大都市圏にありながら、医療機関が乏しく、貧困に苦しむ方々が多く住んでおられました。日本全体としては高度経済成長期にあり、物とお金が急速にあふれた時代でしたが、格差是正は進まず、環境破壊、公害問題が国内各所で発生していました。我が国には国民皆保険制度が施行されていましたが、その恩恵を全ての国民が平等に享受できていたかという、決してそうではなかったようです。

経済的社会的リスクの高い方々へ 真摯に対応し社会医療法人に認定

そのような時代背景にあって、地域住民の生命、健康を守ろうと、有志が集まり、当院は生まれました。日常診療に励む一方、公害や戦争で傷ついた方々への社会医療にも活動を広げました。74年には広島、長崎の原爆被爆者の方々の検診を、78年には

水俣病患者さんの検診を開始しました。88年にはベトナム戦争の枯葉剤被害者救援のために、現地と医療交流を行いました。そのような社会医療活動に、一定の評価をいただいた時代もありました。

日常診療で大切に取り組んだ分野としては、周産期、小児医療があります。当院周辺には経済的社会的リスクの高い方々が多く、その脆さが出産育児を直撃していたことが重点的に取り組むことになった所以です。それが、後の社会医療法人と地域周産期母子医療センターの認定につながったのです。

2007年、私は産婦人科医として当院に着任しました。当院の周産期医療は、産婦人科医としての使命感を強く引き付けるものがあり、分娩、緊急帝王切開など、日々、臨床に明け暮れました。前職が大学教員であったことから、臨床研修医の指導も引き受けることとなり、その関係で松原徳洲会病院の研修医の産婦人科研修も受け持つことになりました。

今思えば、この頃から縁が始まっていたのだと、深い感慨を覚えます。一方、医療制度改革や専門医制度の大き

な変化の中で、創立からの先輩諸氏による病院運営が万策尽き、さまざまな課題が先送りされていました。17年、私が病院長を拝命いたしました。まさに「火中の栗を拾う」心境でありました。以降、電子カルテ導入、医師の獲得、医療機器の更新、老朽化した設備の修理、病棟の改装、周産期センターと行政との連携強化、新型コロナ禍への対応、終末期医療への取り組み、「医師の働き方改革」などに取り組んでまいりました。幸い、当院の使命、地域における必要性をご理解いただいた方々のご厚意が、院内外問わずつながり、何とか昨年まで歩むことができました。しかし、1病院単独での経営再生には限界があり、壁に直面していたところ、幸運にも徳洲会グループに、24年10月に参加させていただくことになりました。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

これまでの自院の歩みから、病院は高い倫理性をもつと同時に、経営も堅持しなければならないということを痛感しています。徳洲会グループ参加と同時に、多くのご支援・ご指導をいただき、具体的になすべきことを実感で

きるようになりました。経理の効率化、ベッドコントロール、組織運営、チーム医療、人材獲得と育成など、枚挙に暇がありません。一つひとつを病院の“身体”に取り込むのに、今は精いっぱいではありますが、その先に、当院の役割、機能を発展させ、地域に残すことを目指しています。

同じ地域にある松原徳洲会病院と 診療や臨床研修で連携でき心強く

同じ地域に松原病院があり、診療や臨床研修で強く連携していただけるのも心強いです。新たな体制の下、本来、当院がもっていた特性を生かすべく、周産期医療のみならず、そこからつながる小児発達相談など、地域の方々が求める医療の展開を始めています。あわせて、総合内科と整形外科を柱とした高齢者の方々を支える日常診療も強化し、人生の始めから終末まで、地域と共に歩む病院でありたいと考えています。徳洲会グループ病院の一員として、まだまだ発展途上ではありますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくご厚意申し上げます。

皆で頑張りましょう。

生駒病院 市民が考える病院の未来 開院10周年控えワークショップ

生駒市立病院(奈良県)は2月9日、院内の講堂で「生駒市立病院のこれからを考える」ワークショップ「まとめ会」を開いた。6月に開院10周年を迎えるにあたり、生駒市と共同で企画した取り組み。同院の今後10年を見据え、昨年9月から3回にわたり議論してきた課題や解決策を、ワークショップ構成メンバーの市民らが総括した。会には遠藤清院長と小紫雅史市長も出席した。



自院の今後について考えを示す遠藤院長



各発表に丁寧にコメントする小紫市長

「病院ができること」「市ができること」「市民ができること」の視点で意見をまとめ発表した。たとえば、「PR」では、病院ができることとして「医療講演など平日に行うイベントに興味があっても参加できない方もいるため、後で録画が見られるようなアーカイブなどがあるといい」、市ができることには「市役所内で連携し広報の強化を」といった声が寄せられた。

また、「医師不足」では、市民ができることに「かかりつけ医をもつことで不要な受診を減らす」「救急車の適正利用」といった意見が示された。

その後、ワークショップの運営をサポートしてきたワーク・ライフバランスの小室淑恵社長

が、トークセッションを行った。「人口減時代に生きのこる戦略とは?~人生100年時代に活躍するシナジーを起す~」と題し、医療を含む地域づくりで大事な視点を解説した。

最後に、遠藤院長と小紫市長が挨拶。遠藤院長は「院長就任時から掲げる“正しい病院”を今後も目指します。正しさにもいろいろありますが、嘘をつく病院にはしたくないです」と、あらためて決意表明。

そのうえで「AI(人工知能)やロボットの活用が加速化し、今とは劇的に異なる世の中が恐らく10年たらずに訪れると思います。それに対応する病院、地域医療を目指していきたい」と展望し、「とはいえ、目先のことも大事。皆さんの意見は私の考えと似ているので、今後も関心をもって当院を見てください」と締めくくった。

小紫市長は「10年先を見据えるのは難しいですが、短期に何をすべきか、状況が変わればアップデートしていくことを共有することに意味があると思います」と、ワークショップの意義を強調。今後、地域医療を防災の側面からも検討する考えを

明かした。

終了後、参加者からは「新たに知ることが多く、貴重な経験になりました。以前、深夜に電話して受診したことがあり、その時の対応がとても良かったです。今後も頑張ってください」といった声が聞かれた。

同院の持田幸久事務長は「病

院に一般の方が来て話し合う機会は少ないと思いますし、何より、私たちには思いつかないアイデアが生まれるので、良い機会になりました」。6月には生駒市内で開院10周年記念イベントを予定。ワークショップで寄せられた意見をもとに、同院は今後の方向性を示す予定だ。



特養逗子杜の郷 神奈川県公式YouTube 夢叶える取り組み紹介

特別養護老人ホーム(特養)逗子杜の郷(神奈川県)は、2024年度「かながわベスト介護セレクト20」に選出、神奈川県公式YouTubeチャンネル「かなチャンTV」で紹介された。同施設では、日本ダイバーショナルセラピー(DT)協会が認定するDTワーカーの資格をもつ職員が専任となり、利用者さん一人ひとりの夢を叶える取り組みを実践。

これは各個人がいかなる状態にあっても、自分らしく、より良く生きたいという願望を実現するため、「楽しみ」と「ライフスタイル」に焦点を当てた全人的アプローチだ。

動画では「お酒を楽しみたい」という利用者さんの夢を叶え、施設内に居酒屋を開店した様子を紹介。矢萩弘美・介護福祉士(DTワーカー)は「日々同じことが繰り返される日常に、スパイス的なものを付け加えることで、生きる活力につながればいいと思います。そのお手伝いをしたい」。山本裕・介護副主任(DTワーカー)も日々のなかにある利用者さんのつぶやきを聞き逃さず、「その夢叶える」ように動いている。

田邊笑美子施設長は「その人のいのちを大事にして、いのち尽きるまで輝いてもらいたい。ご家族にもその輝きをしっかりと思い出してもらいたいです」と意欲的だ。



動画はこちらから



神奈川県公式YouTubeチャンネル「かなチャンTV」で紹介